

目的

知服縫製上、技術の基礎である運針について、その特性を研究し、正しい運針方法の把握を図り、実習指導上に活用することを目的とした。今回の研究では未熟者について行った結果と、これまでの実験結果とを総合して検討を加えた。

方法

被検者の運針動作を高速度写真で撮影し、そのフィルムを再現、手の測定点の動きの軌跡を追って動作波形を画く。この動作形態と、分析の両面から運針動作の基本的原理を解明するように努めた。被検者は短期大学被服科学生で、入学後半年を経過した未熟者を選んだ。測定日・服装・撮影条件は前回の熟練者と同様である。試料布は平絹・ブロード・浴衣の3種を用いた。運針条件はつかみ間隔10cmの線有・線無の計6種類である。

結果

これまでの実験を総合して次のことが言える。

1. つかみ間隔は10cmが適当と考えられる。
2. 左右の手の動きは対称的に対応し、一定のバランスのとれたリズムが必要である。
3. 動作の安定度は、周期性から観察することができる。特に右手の安定性が針目の正確性に影響を与える。